

フランスの
フォンテーヌブロー
ヨーロッパ

キリスト者の集い



パリ郊外のフォンテーヌブローにある世界遺産に登録されているフォンテーヌブロー宮殿(左上)、芸術家の村、バルビゾン村(下)



集合写真

子どもたちによる賛美
(上は小学生・未就学児。下は中高科)



わたしは毎日喜び、
いつも御前に楽しみ、
人の子らを喜んだ。
(箴言 8章 30、31節)



「帰国者の会」のようす



七月三十一日から八月四日まで、フランスのフォンテーヌブローで「ヨーロッパ・キリスト者の集い」が行われた。ヨーロッパや日本、また世界各地から二百八十七名が集まった。今年で三十回を迎えるこの集いは、当時デュッセルドルフ日本人キリスト教会に所属していた一人の信徒の呼びかけによって始まった。当初は、「ヨーロッパ各地に住む日本人のためのプロテスタント超教派集会」というアイデアに、気乗りしない人も多かったという。しかし、一九八四年にドイツ・ブッパールでひとたび開催されて以来、一年も欠かすことなく行われてきた。この集いは大人のためのプログラムだけではなく、教会

学校(子ども向け集会)や高校生向けの集会も並行して行われている。子どもや学生にとっても年に一度、同じ年代の同じような境遇の人たちと会える貴重なチャンスで、毎年この集いを楽しみにしている。三十回を迎えた今回の大会のテーマは「信仰の原点を求めて」。この節目の年に「信仰の原点に立ち返ることを確認したかった」と今大会の実行委員長である作田銀也さんは語る。作田さんはこの集いが発足して以来、毎年欠かさずに参加してきた「皆勤者」だ。自身の長年の経験からも、似た境遇にある者どうしの交わりの大切さを実感している。しかし、「ただの同窓会で終わりにしてはいけない

い。やはり、聖書から学び、信仰の原点に立ち返って歩むことが必要です」と、今回の大会の準備段階で祈り願ってきたことを語ってくれた。

から信仰をもつ人の中には、子どもの頃教会学校に行っていた人や、キリスト教系の幼稚園学校に通っていた人をはじめ、何かしらの形で教会に行ったことのある人、聖書のことばに触れる機会があった人が少なくないということが語られた。

作田さんと同じように長期間にわたってヨーロッパに在住し、毎年この集いに参加する人も数多くいる一方、仕事の都合で短期間滞在している人、ワーキングホリデーや留学でヨーロッパに滞在している人など、参加者の状況はさまざまである。その中で特筆すべきは、滞在期間に関わらず、ヨーロッパでクリスチャンになり、この集いに参加している人が多くいる点だろう。今回の大会でも、そのような人が大勢いた。

その一方で、ヨーロッパで信仰をもったとしても、日本に帰国後教会から足が遠のいたり、信仰から離れたりしてしまう人が多いことも事実だという。帰国者の会でも、送り出すヨーロッパの教会の立場から、また受け入れる日本の教会の立場から、さまざまな意見が交換された。

しかし、「ヨーロッパで芽を出してクリスチャンになることは確かに多いですが、種は日本でまかれていて方が多いのです」と語るのは、在欧日本人宣教会主事の横山基生さんだ。自由時間中に行われた、この「帰国者の会」では、ヨーロッパに来て

第三十一回ヨーロッパ・キリスト者の集いは、来年の夏、ベルギーのレティーにて開催される。参加者たちは、来年ベルギーでの再会を楽しみにしつつ、今日もヨーロッパ各地で、日本で、世界で、主のわざに励んでいることだろう。

(レポート・長下部美香)